

令和4年度全国学力・学習状況調査【概要】

浜中町立茶内小学校

7月28日（木）に文部科学省から、4月19日（火）に実施された今年度の全国学力・学習状況調査の結果が公表されました。本校の学力や学習状況についても、文部科学省からデータが提供されたことから、保護者や地域の皆さんに「概要」として報告いたします。なお、調査結果については、学力の特定の一部であることを申し添えます。

1 本調査の概要

(1) 目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年の原則として全児童生徒

(3) 調査形態

○教科に関する調査

- ・調査対象教科は、国語、算数・数学ですが、4年ごとに理科（小・中学校）、英語（中学校）も実施され、今年度は理科が実施されました。
- ・出題範囲は、原則として調査する学年の前学年までに含まれる指導事項です。
- ・出題内容は、次の2点が一体的に問われます。
 - ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
 - ②知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

○生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・調査する学年の児童生徒を対象とした、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査（児童生徒質問紙調査）
- ・学校を対象とした、指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査（学校質問紙調査）

2 教科に関する調査

今年度は、国語、算数、理科の3教科が実施されました。各教科の正答率等は次のとおりです。

	国語	算数	理科
茶内小	72	63	70
北海道	64	61	63
全国	65.6	63.2	63.3
全国差	+6.4	-0.2	+6.7

【全体的な考察】

国語と理科で全国平均を6ポイント以上、上回っています。算数は全国平均を0.2ポイント下回っていますが、全国同等といえます。このことから、本校の児童は、国が求めている学力が概ね身に付いていると考えます。

【今後に向けて】

各教科において共通の課題である記述式問題に対する改善策を具体的にするとともに、児童自身が主体的に学習に取り組める環境を整備していきます。

【国語に関する考察】

話し言葉と書き言葉の違いを問われた問題や、必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを中心に捉える問題、人物像や物語の全体像を具体的に想像する問題の正答率は8割を超えています。一方で、文章全体の構成や書き表し方などに着目して文や文章を整える問題や、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける問題の正答率は5割程度でした。また、全体的に無回答率は低いです。漢字の「反省（はんせい）」を書く問題の無解答率が全国平均を上回っていました。

【今後に向けて】

自分の考えを文章化することに課題が見られました。特に、立場を明確にして質問や意見を述べること、話し手の意図を捉えながら自分の意見と比べて考えをまとめること、文章全体の構成に着目して文章を整えることなどの問題の正答率が低いことから、学習指導要領に示された「指導事項」を踏まえて授業改善を進めていきます。

【算数に関する考察】

1050×4 を計算する問題や、14と21の最小公倍数を求める問題、長方形のプログラムについて、向かい合う辺の長さを書く問題などの正答率は8割を超えています。一方で、 85×21 の答えが1470より必ず大きくなることを判断するための数の処理の仕方を選ぶ問題や、果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ問題の正答率は2割程度でした。また、無解答率は低いです。果汁が40%含まれている飲み物の量が1000mlのときの、果汁の量を書く問題や、果汁が30%含まれている飲み物に果汁が180ml入っているときの、飲み物の量の求め方と答えを書く問題の無解答率が全国平均を上回っていました。

【今後に向けて】

割合の設定における誤答が目立ちました。ある二つの数量の関係と別の二つの関係とを比べる場合に割合を用いる場合があることを理解したり、伴って変わる二つの数量を見出して、それらの関係に着目し、表や式を用いて変化や対応の特徴を考察したりする活動を位置付けた授業改善を進めるとともに、第4学年段階から、「変化と関係」の領域を重点的に指導していきます。

【理科に関する考察】

見出された問題を基に、観察の記録が誰のものであるかを選ぶ問題や、実験の結果から、問題の解決に必要な情報が取り出しやすく整理された記録を選ぶ問題、冬の天気と気温の変化を基に、問題に対するまとめを選ぶ問題などの正答率は9割前後です。一方で、問題に対するまとめから、その根拠を実験の結果を基にして書く問題や、光の性質を基に、鏡を操作して、指定した的に反射させた日光を当てることができる人を選ぶ問題の正答率は3割から4割程度でした。また、無解答は1問（問題に対するまとめから、その根拠を実験の結果を基にして書く問題）だけでしたが、無解答率が全国平均を上回っていました。

【今後に向けて】

獲得した知識を日常生活に応用して理解することが苦手であることが分かりました。教師があらかじめ用意した流れの中で実験や観察を行うのではなく、児童自身がその流れを考えるなど、問題を見出す過程を重視した授業改善を進めます。

3 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査（児童質問紙調査）

「69」の質問事項が設定されています。その中から、「基本的な生活習慣等」、「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等」、「学習習慣、学習環境等」の質問事項における「特に留意する必要があると考えられる項目」について報告します。

(1) 基本的な生活習慣等

【考察】※課題は網掛け

①朝食を毎日食べている児童の割合は100%であり、全国平均より5.5ポイント高い。
②毎日、同じぐらいの時刻に寝ている児童の割合は83.3%であり、全国平均より1.8ポイント高い。
③毎日、同じぐらいの時刻に起きている児童の割合は94.4%であり、全国平均より4ポイント高い。
④携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている児童の割合は77.8%であり、全国平均より6.3ポイント高い。
⑤普段（月曜日から金曜日）、2時間以上、テレビゲームをしている児童の割合は61.1%であり、全国平均より10.9ポイント高い。
⑥普段（月曜日から金曜日）、2時間以上、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などを行っている児童の割合は33.3%であり、全国平均より0.8ポイント高い。

【今後に向けて】

家庭における生活習慣の確立の過程において、テレビゲームをする時間を自分で管理できたり、意図をもって動画等を視聴できたりする力を子どもに育む必要があります。そのために、未来社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を、子ども、保護者、教職員の三者が共有し、ワークショップ等を通して、当該の資質・能力を育むために何が必要かを明確にします。

(2) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等

【考察】※課題は網掛け

①自分にはよいところがあると思っている児童の割合は83.4%であり、全国平均より4.1ポイント高い。
②将来の夢や目標をもっている児童の割合は88.9%であり、全国平均より9.1ポイント高い。
③自分で決めたことは、やり遂げるようにしている児童の割合は83.3%であり、全国平均より3.9ポイント低い。
④難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している児童の割合は61.1%であり、全国平均より11.4ポイント低い。
⑤人が困っているとき、進んで助ける児童の割合は88.9%であり、全国平均と同じである。
⑥いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思っている児童の割合は100%であり、全国平均より3.2ポイント高い。
⑦困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる児童の割合は50%であり、全国平均より18.1ポイント低い。
⑧人の役に立つ人間になりたいと思っている児童の割合は100%であり、全国平均より4.9ポイント高い。
⑨学校に行くことは楽しいと思っている児童の割合は88.9%であり、全国平均より3.5ポイント高い。

⑩自分と違う意見について考えるのは楽しいと思っている児童の割合は66.6%であり、全国平均より6.9ポイント低い。

⑪友達と協力することは楽しいと思っている児童の割合は94.4%であり、全国平均より0.4ポイント高い。

【今後に向けて】

子どもたちの発達の段階等を改めて確認し、日常の生活や授業、行事等のねらいの質の向上を図ります。そして、子どもたちに意図的に負荷を掛ける場面を設定し、自身や友達（家族）と協力して解決していく過程を評価することを重視します。また、学校生活において、多様な人材と関わりをもつ機会（道徳授業や給食指導等のローテーション化）を意図的に設定します。

(3) 学習習慣、学習環境等

【考察】※課題は網掛け

①家で自分で計画を立てて勉強をしている児童の割合は88.9%であり、全国平均より17.8ポイント高い。

②学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1時間以上、勉強している児童の割合は88.9%であり、全国平均より29.5ポイント高い。

③土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1時間以上、勉強している児童の割合は88.9%であり、全国平均より32.8ポイント高い。

④学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、30分以上、読書をしている児童の割合は33.4%であり、全国平均より3ポイント低い。

⑤家にある本の数が100冊以下であると回答した児童の割合は77.8%であり、全国平均より13.7ポイント高い。

⑥新聞を週に1～3回程度以上読んでいる児童の割合は0%であり、全国平均より13.8ポイント低い。

⑦読書が好きな児童の割合は66.6%であり、全国平均より6.5ポイント低い。

【今後に向けて】

学校においては、国語科の授業を通して、読書に関する指導事項を確実に指導するとともに、「読むこと」領域に示されている言語活動例（学校図書館の活用）を参考にした授業改善を進めていきます。また、児童会活動においても、「読書貯金」や「ビブリオバトル」等の取組を企画することが考えられます。家庭においては、町の図書館を活用して、親子で読める本を紹介してもらったり、読み聞かせの機会を設けたりして、親子で読書に親しむ機会を創出します。また、家庭で社会情勢等について話題にするなど、新聞の必要性を実感できる機会を設けます。